



清溪松の朝

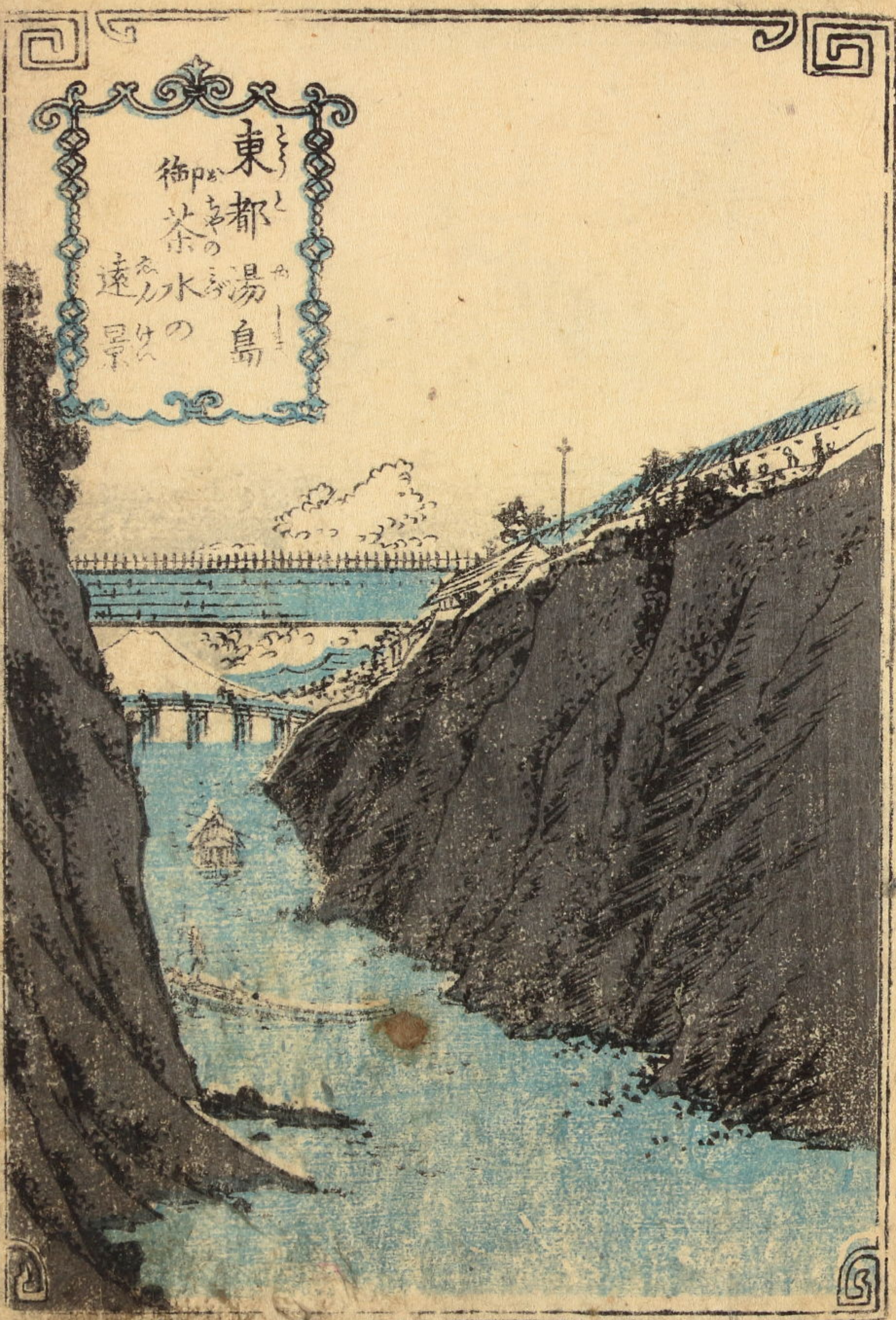
次又巻

三冊

入
二
三
四
番

^ 13
1309
1





東都湯島
 御茶の水の
 遠景

狂まが列れつのの舞まのの應おのの漫まん

志しめめ一一竹たけのの

舞まののききのの酒さけのの妙たえのの妙たえのの

志しのの妙たえのの妙たえのの妙たえのの

干かのの妙たえのの妙たえのの妙たえのの

和わのの妙たえのの妙たえのの妙たえのの



總くみが窪くぼ仲なの町ちやう乃
 朝あさ斜さ九く良ら

とうとう
 ぬれぬれ
 ぬれぬれ
 ぬれぬれ



東武五本松の一木
 金屋堀の古松寫真

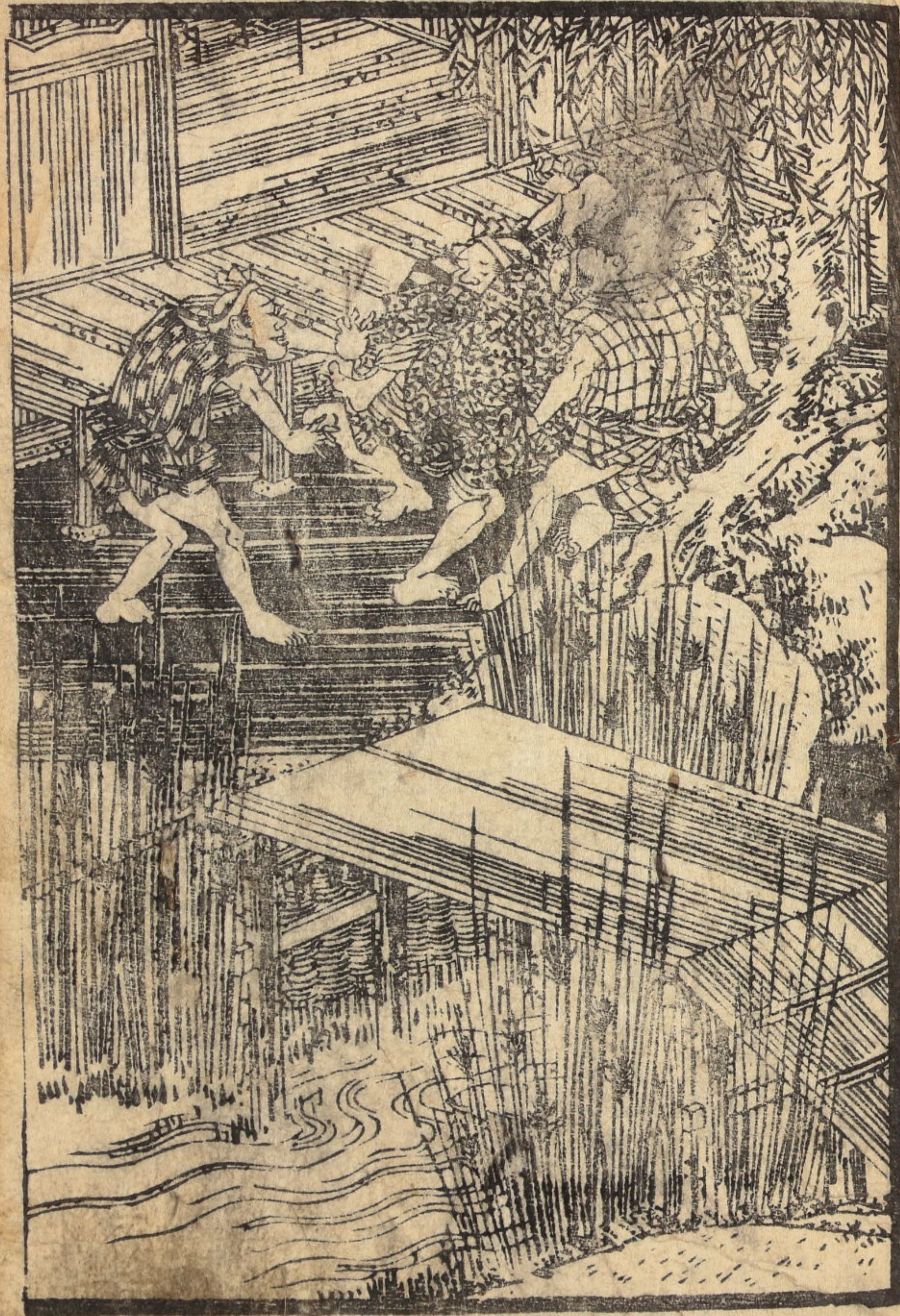


清談
 松文の調初編上之卷

江戸 爲永春水作

第一回

富を奢るは貪うるを乞ひ乞ひとて自ら其の徳を
 他の洗判もある事トけほど然るるぬのが人勝るを貪福とも不
 行状のる不屋あるや世の常事とて今更にも思ふ事と
 文を負ふの貪の字より思を分るとり字のそよとて思ふ事と
 おもはる最悪うきりの人ありて万金を貯て主錢奴とす



寛永御所でお月よりとまると秋の仕合よりとまると下
是一巻のむらぎを掛上 衣紋と結ひ 草紙結び 虫灰より形
空を須松の何を多く見せ居るうし 今の様は乳香
ゆいふせしを御... 思ひのまの更兼 今香ふはうと何と
やう晴ら... の巻は 月も和らふ花の顔より... 家の結
とまるとゆいふせし... のあ、毎度おまるとお和佐と今... 物と
顔と腹は... 腹もま... 危き災之難をまぬ... 味と合
急りうけん後容見合に目の御お... の情を... せんの

思ひは... とゆいふせし... のあ、毎度おまるとお和佐と今... 物と
顔と腹は... 腹もま... 危き災之難をまぬ... 味と合
急りうけん後容見合に目の御お... の情を... せんの

ゆる降る

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

第二回

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

あつたてのついでに

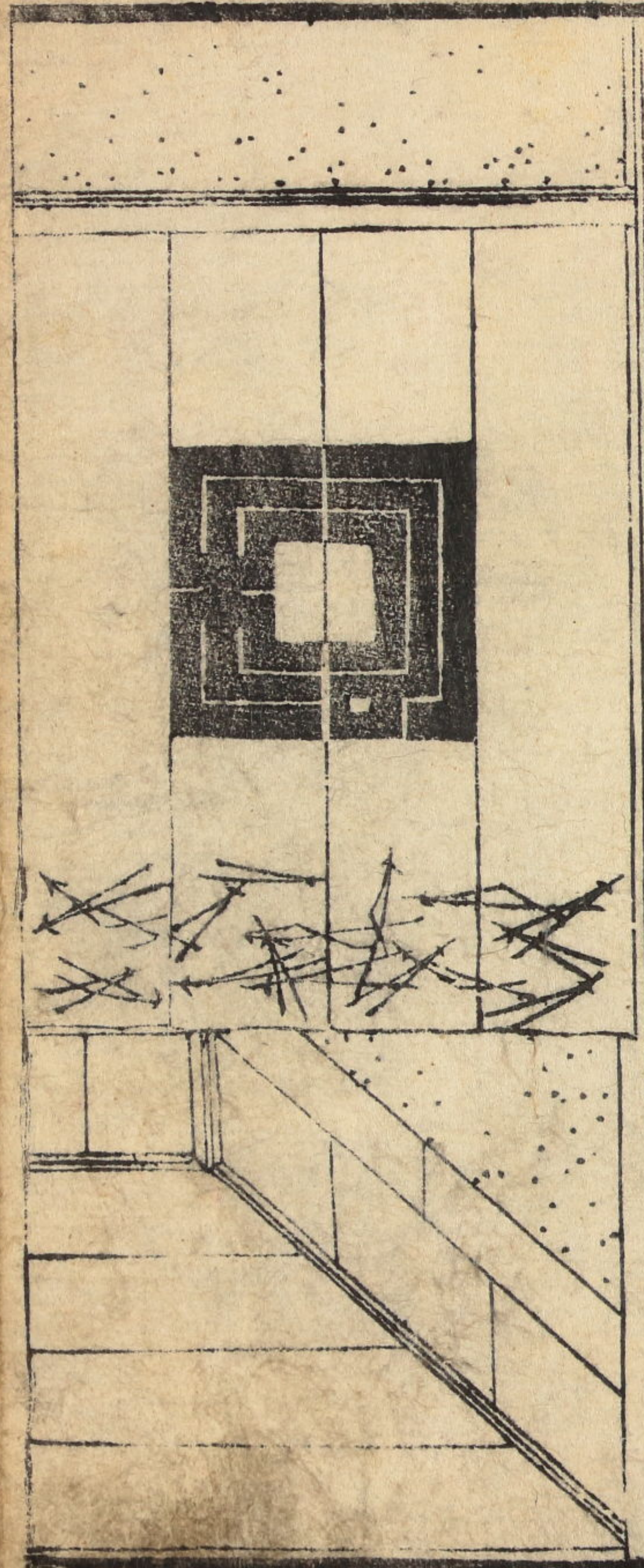
あつたてのついでに

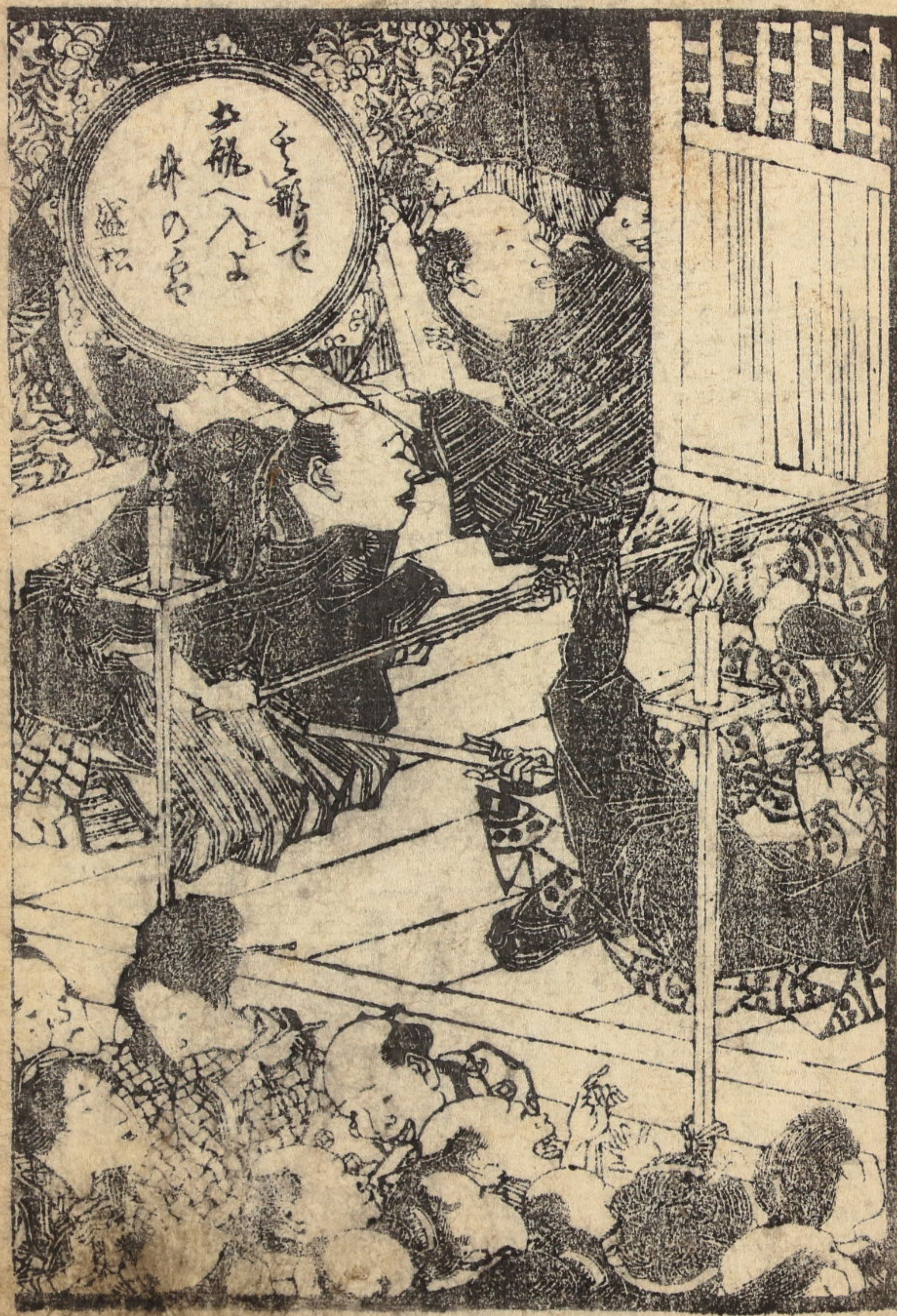
あつたてのついでに

あつたてのついでに

そのく 須松一清の二個が 狂ひ小使さるるその家ハ
 同下 輝文川の古地ふく東ふようなる 辺郡町を放
 せし 別荘さう主人の娘が武家へ 給仕宿りもの氣負
 ころ 諸家の達者さほむるも 業番 ねし居の性しゆ
 まふく 家業人ふまはるる 子子の けりし くれがき面
 白きものりんかき ぼよ茶番もく 浅草の 業持達
 防町の 登り美えり香焼 一清の 友達 冥風 せり 外 登り 業番
 役ふ 須松せり 家と して かせむる 人の けり物 二 味 味 味 味

兼田書りてく 狂言作者さく 道具をかきも 橋本橋ふ
 又一分二分の 達者さるる けりし 業番
 一番目の 大 業 者 けりし





おもしろいなり おもしろい 一 いち ちから ちから 多く おほく する する 役者 やくしや
秋 あき 左 ひだり の の よう よう 羽 はね 左 ひだり の の よう よう 好 この 女 にょ
安 やす 好 この 男 おとこ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ 好 この 女 にょ の の 女 にょ
よ よ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
途 みち 中 ちゆう が が 淋 しみ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
物 もの の の 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
繁 はげ 々 々 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ

ト と 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
物 もの を を 用 もち 合 あ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
最 も も も 勝 か 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
風 かぜ 雅 みやび 人 ひと 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
諸 しよ 方 かた の の 身 み 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
何 なに 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ
一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ 一 いち 多 おほく 女 にょ の の 女 にょ

まをすこのごアチ 栄一ヤとまら大なるまをすご人まら
けま何のひるまのむ言と心真のま想つと二なるまの
のまごまかまらま 油一 結チねしやまもも三及の働ご
うま小まらく草所と極す 栄一玉及もも三及とるまの
るまごまかまら 油一 結チねしやまもも三及とるまの
是よりお和佐のまらまの昭夜見らるるまのまら
ま委く結る

まららお和佐の心宅へ出連入をまらして昭夜
のまらるる目が賞つとけお娘が真のまらまへまをまら成
とりのまらら今秋お和佐さんのま成程まをか和佐さんが
見にけままららるるまらるるまらまを昭夜まの所へまら
行合とまのまを想つて出所まをまら連れまらるるまら
の心縁とまらまらまらまらまらまら 油一 結チねしや
お和佐さんご使侍まらまらまらまらまらまらまらまら
後客と見まらまらお和佐もまら思つてわらまらまらまら

常ノ字才四巾の

小修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

子修子

清談 松之調 初編卷之二

江戸 為永春水作

第三回

狭容とのなき花や寒椿 愛ふ一個の好男 艶弱のあふぬ
通人湯が島と稱町家 湯坊屋忠く助と公之高人
御名を松木庵一清と号まじまき若る者ることと日修あり
携へ給信り婦人ふ好る風俗まじまきをいふ余り身は清く
時風流と云達の酒席の交會 世活好むを室より一流の男を

ありしはけ理りてくゝの贅帯を保養の寄とて佐初の信を
あせる近侍の下の町家やぐ佐一くゝの信を二つは
三尺の芝戸を付一垣の田宅は一個の倉容今もよくと
表の本戸を押明を入る姿は並るを他見の同女一女の
ハイも免を成す一忠人しけりてそ隆人をおまをひひと
とわう「よ春まん只一人のまうて戸持守をしとを
同をお覺し「ヨトは起まをて「春「お色よのト殿と
細く穿く「お色よのまひひんでわう「お色よのまひひんで

塩梅がころひとやあませんこまよに風邪でもひくとゆけ
ません「一本二巻ごッケノ今貝は皆が留守で六あり「一巻
か又同け別後人を通し止宿をおまを所時湯のゆ
言をせめめは成さあえまう帰るが遅らうと餅くま
う「我あが孫入るころ書へく「お色よのまひひんで
風邪をおひき「お色よのまひひんでお色よのまひひんで
お色よのまひひんでお色よのまひひんでお色よのまひひんで
トキ三今貝の信を七家内を接出してま

うら極川の美師きぬでゆりごひの加藤がとらまうて結ぶめ
よく功程とりあうお参りをして願ひてまことの事だつて
夢の肉筋のお肉をまんが同様なゆりと言ふう定梅次
どん梅次どんを連てめてまうてのやまを待てと梅次
のらして遊今日来うんでまうてまうて先達様より
お梅次が世えて狂言をかまうてまうてのやまを待てと梅次
らまうてまうてのやまを待てと梅次
あつてまうてまうてのやまを待てと梅次
まうてまうてまうてのやまを待てと梅次

しり私まやアまあおをまうてまうてのやまを待てと梅次
梅次と一公の初りまうてまうてのやまを待てと梅次
ね人の森が身の上と結縁が他めよとまうてのやまを待てと梅次
うまのまうてまうてのやまを待てと梅次
世の肩が狭つてまうてまうてのやまを待てと梅次
らまうてまうてのやまを待てと梅次
思ふのまうてまうてのやまを待てと梅次
まうてまうてまうてのやまを待てと梅次



成なりませんんヨトト 鬱ふさ息しととししささうう 儻たうくくおお色しかかをを思おもひひかかりりて
春はるのの神かみもも俱ともにに替かへへ替かへへせせししがが 春はる 三さん丈じやうもも長ながひひ月つき日ひのの中なかにに
ままささ大だい多たのの花はなのの色いろのの解とけけるるかかううふふはは様やうももああららふふららととん
ああのの氣きををももららななままささんんののヨヨ 彼かれははとと苦く勞らうををううららしして
おお茶ちやがが 梅うめもも悪わるくくああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて
ととままのの身みアアはは様やうががああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて
志しとと之これ一いつささううととおお茶ちやのの可か愛あいららししのの顔かほででもも見みせせるるトト笑わら
ああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて

ささららににももおお茶ちやのの顔かほをを見みるる一いつささううとと笑わら
中なかのの身み 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて
人ひとのの顔かほがが 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて
裏うらのの別わかれれのの辺へにに 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて
圓まるいいのの淺あららのの文ぶん句く

花はなののかかみみのの顔かほとと白しろ合あせせてて見みててああららししてて
早はやににおお茶ちやのの顔かほをを見みるる一いつささううとと笑わら
ああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて 春はるのの花はなのの色いろももああららししてて

寄の且都がとらつてゐる一清さんみははらひのや
よどやちぢを解つ湯でも湧いてはまかせよト箱火
体の隙へりしき入るもくちかひのまかせんヨ何れ
わくと湯熱身のま前へ帰して来る松水考一清風
雅と海落の通りもの一清へりたまふほほくま
あさくや春さん今日日顔色がたかきは陽よそくお色
まん結おせし一清へり今貝極川の葉師とるへま
一清へはのりたまふは前へ後想てあまよるへま

松智山の観光
せん園ののどきおのたまはまはらひのまかせんヨ何れ
あさくや春さん今日日顔色がたかきは陽よそくお色
まん結おせし一清へり今貝極川の葉師とるへま
一清へはのりたまふは前へ後想てあまよるへま
あさくや春さん今日日顔色がたかきは陽よそくお色
まん結おせし一清へり今貝極川の葉師とるへま
一清へはのりたまふは前へ後想てあまよるへま
あさくや春さん今日日顔色がたかきは陽よそくお色
まん結おせし一清へり今貝極川の葉師とるへま
一清へはのりたまふは前へ後想てあまよるへま

春の雨や 徒らに 弾 ちのび 盛松

清きん小 独りく お樽をやりて 景を成ヨ 空はひ 月は一清
さんのお 影で 何程のあゝ 気が丈丈と 春ハ 東ニ 左様で
あまのま 空はひ 月を 影入る 一清ハ イヤ 東ニ 左様
まのまの 影様と 夕ハ 空ニ 月を 必竟 友達の好
まのまの 影様と 夕ハ 空ニ 月を 必竟 友達の好
おんぞ 影のまのま 月も 影ハ 月を 必竟 友達の好
他人を 目にした 見下した 影ハ 影の 必竟 友達の好
の通人 まで 影のまのま 月も 影ハ 月を 必竟 友達の好

清きん小 独りく お樽をやりて 景を成ヨ 空はひ 月は一清
さんのお 影で 何程のあゝ 気が丈丈と 春ハ 東ニ 左様で
あまのま 空はひ 月を 影入る 一清ハ イヤ 東ニ 左様
まのまの 影様と 夕ハ 空ニ 月を 必竟 友達の好
まのまの 影様と 夕ハ 空ニ 月を 必竟 友達の好
おんぞ 影のまのま 月も 影ハ 月を 必竟 友達の好
他人を 目にした 見下した 影ハ 影の 必竟 友達の好
の通人 まで 影のまのま 月も 影ハ 月を 必竟 友達の好

一 疾流の仇着不替の情の山吹衣童の無縁と好ま
 うりて世は通ひかゝる境 何れも丹波と云ふる懐知
 まぬ意を産迷へば接まらざる雲子の月の隈に雲るる
 夫と客との伴之町と見取と論と屋屋で妻と釈述と
 孔子の四界見ても承知と云ふ入相や化と云ふの息も
 達賢多く小欺と云ふて意を産迷ふ人何れも昔と為る
 出世の息も入親父の論と云けても巨細不修屋と
 後月の息も人寄けと云ふ又取情の正直もて産信の勝り

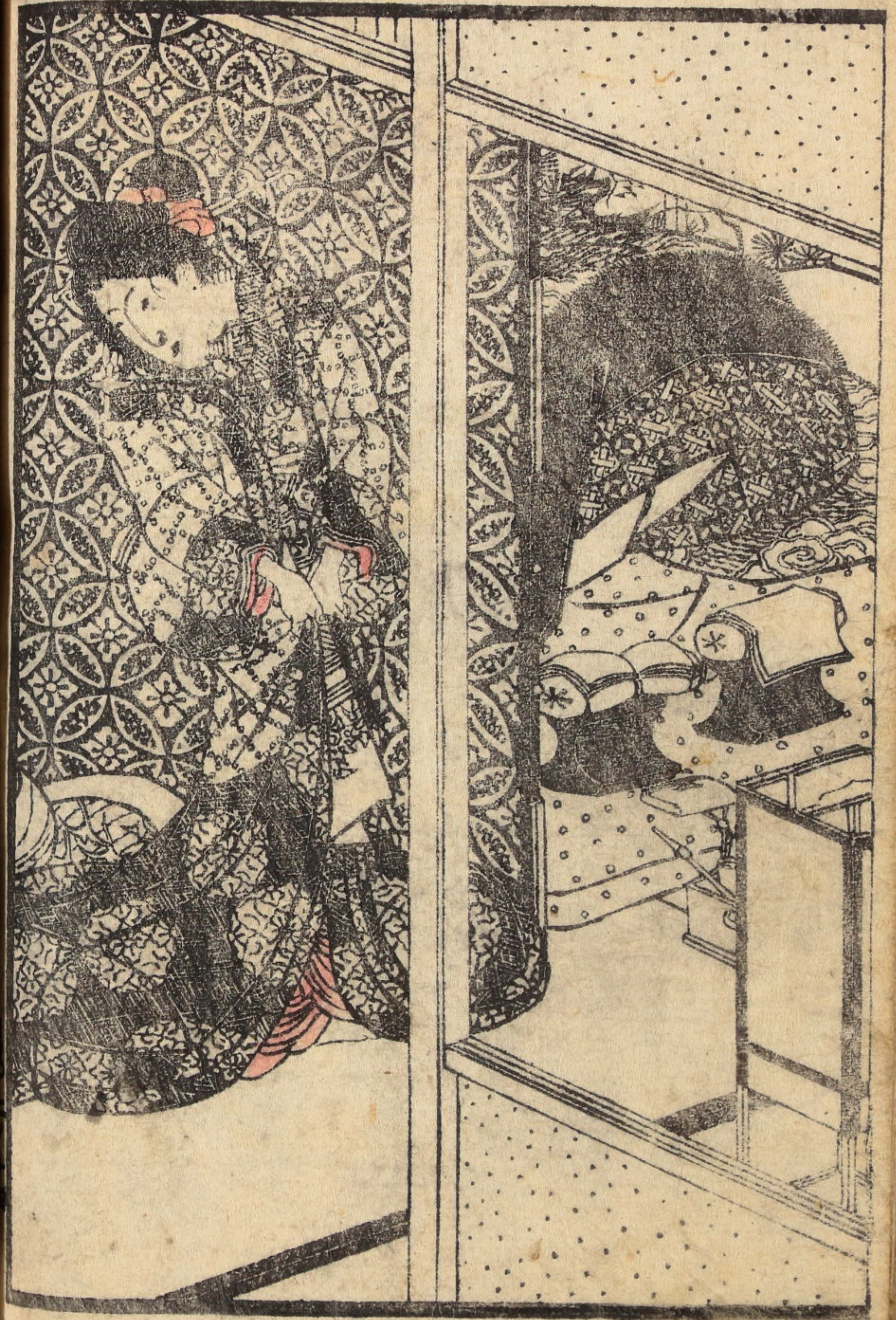


一 疾流の仇着不替の情の山吹衣童の無縁と好ま
 うりて世は通ひかゝる境 何れも丹波と云ふる懐知
 まぬ意を産迷へば接まらざる雲子の月の隈に雲るる
 夫と客との伴之町と見取と論と屋屋で妻と釈述と
 孔子の四界見ても承知と云ふ入相や化と云ふの息も
 達賢多く小欺と云ふて意を産迷ふ人何れも昔と為る
 出世の息も入親父の論と云けても巨細不修屋と
 後月の息も人寄けと云ふ又取情の正直もて産信の勝り

湯屋の
 山吹衣
 松縁庵
 春晷



おふ舞ついで
様の壁にそり
山々延津矣



すま せうごう
於る今昔くらぬ花の咲つづけ七実をいへる花びら
ゆづ 実ふちるが 舟 しまぬ 舟のひま くらぬ 花の
いひのむらさき ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ゆづ せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
いひ 他人の ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
いひ 雲 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ゆづ せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
居る せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

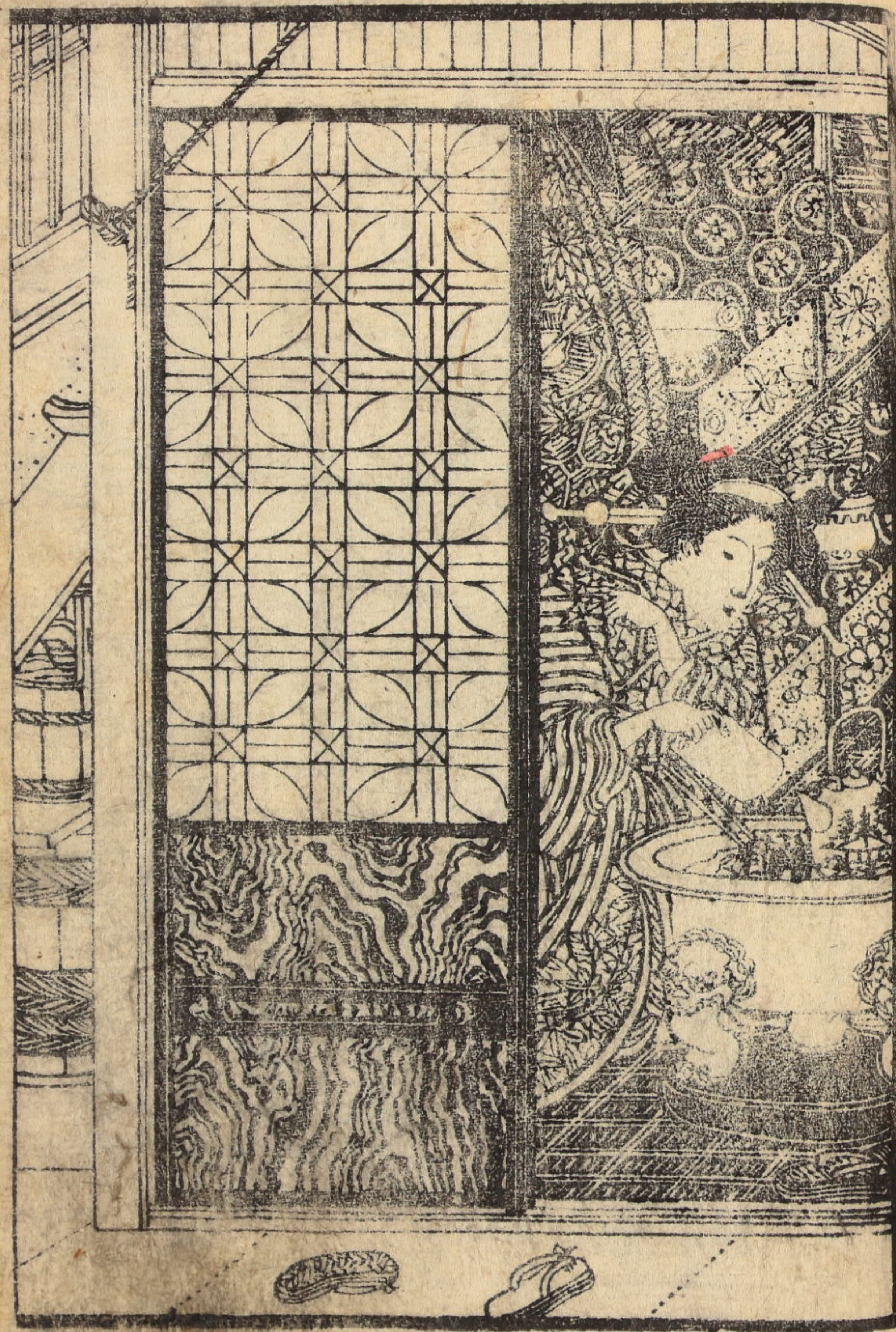
まの 雲 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ゆづ せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
いひ 他人の ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
いひ 雲 ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
ゆづ せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり
居る せんげん ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり ちり

運番を其のつらき見極りのたのひはたつみエト言仲の
早候とて大なるの心を雲路もくもくして傳へさせ給
候と押入路へ報まやア他人の傳言どうぞと思ひて居
あこのみよとてや実のよ左候はのまじりて至大
きん報まやア何様しらせうと悔し候は後伏せお
隣子の外ゆて「香山ましく」ちよつと其でお
「今ハ今ハ今ハ」大ハ「香山ましく」失うた
此の跡へ何様しう同さぬしう「ハ」

あつたはんが「あつたはん」か「あつたはん」ト
あつたはん「あつたはん」大なるおはなり
おはなり「あつたはん」おはなり「あつたはん」
行で直まを後を「あつたはん」や「あつたはん」
ト座下へ「あつたはん」時「あつたはん」座下へ
あつたはん「あつたはん」あつたはん「あつたはん」

あつたはん「あつたはん」あつたはん「あつたはん」
あつたはん「あつたはん」あつたはん「あつたはん」

あつたはん「あつたはん」





トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

トッソいぢうぢぢ

再説お松の傍をよつとまきくお雪の側へ寄つておの
そのま 貴嬢へ 貴嬢へ 貴嬢へ 貴嬢へ 貴嬢へ
榮菴の側へ 榮菴の側へ 榮菴の側へ 榮菴の側へ 榮菴の側へ
まこのせお春けやまのそと若旦那 潤松 さぬハ
春和町の日本宅とお出のまぐと 公儀へまきくの方へ
行てお仕奉は成まじふ付て大徳ごころをばらまき
ゆきも 難文さんとのふお方と 榮菴さんとゆふお方の上
方と西國ともまきくお母なまやふりこやとまきく

まのそとお使の人のまきくとやて直木降うまきく
お春の物どき 暫時口西をまきくける
この一回の初編より 競もまきく 演を榮の潤松が未
春和町の父母の許ふりて 忍合住の町のとまきく
お雪とのふ潤松の本妻の備るべに物束のつて
かひ 潤松を 墓の分家さまれハ 殿入のま
のふとのまきく 潤松のまきく 潤松のまきく 潤松のまきく
お春の金をまきく 潤松のまきく 潤松のまきく 潤松のまきく

